す。

松浦佐用姫

羽衣、浦島と共に日本三大傳説の一つとして知られている戀物語りであります。　宣化天皇（今から約千五百年前）の御代、朝鮮の新羅が、日本と仲の好かつた百濟を攻めたので、天皇は、大伴鹿と大伴狹手彦の兄弟に新羅を討つよう命じられました。　兄は筑紫の太宰府に残り、弟の狹手彦が兵を連れて朝鮮に渡るべく松浦の里篠原村（今の唐津線呉服町笹原、又一説には市内鏡、原附近）に来て滞在致しました。　こゝの長者の娘に弟日姫子と云う実に綺麗な乙女がいました。　この姫が、松浦佐用姫ですが、大伴狹手彦は都人であり、凛々しい若武者で、遂に二人の間に恋の焔が燃えさかつたのでした。　然し狹手彦には新羅討伐と云う大使命があり、愈々船出の日が参りました。

二人は盡きぬ別れを惜んだのですが、狹手彦は　恋慕う佐用姫を振り切つて　松浦潟から船出しました。　佐用姫は悲しみに耐えかねて、はるかに船影の見える限りはと、鏡山に登つて、遠ざかりゆく　夫狹手彦の船に衣の領布（今のショールの様なもの）を打振り〳〵名残を惜んだのでありました。　領布振山の名は　このことから出たものといわれます。　それでも佐用姫は　未だ夫の事が忘れかね、船跡を追つて、夫の名を呼びつゝ（呼子の名はこれから生れたものといわれます。）　小舟で島（加部島、佐用姫神社、田島神社あり）に渡つて、小高い山に登り、夫の船は何処と探しもとめたのですが、漫漫とした海原には、船影一つ見えませんでした。　精魂を枯らした姫は、そのまゝ打ち伏して石と化してしまいました。

これが有名な望夫石です。　昔から万葉の歌に謡曲に、浄瑠璃に歌い謳まれた、悲しい恋物

語であります。

関の清次の話

今の玉島に、昔　関の清次と云う力の強い男がいて、「自分は給田の他に陽田を持つている。」と云い、「これは他言するな」と今の糸島郡の浜くぼ次郎と云う友人に話した処、その男は、直ちに他人に話して終つたので、清次はそれを聞いてカツとなり打殺して終いました。　そのため清次は、牢に入れられたが、力の強いので　牢を破つて逃げ出しました。

それで領主は　妻を捕えて、太鼓を打たせ、それを合図に　その子を責めて、清次のありかを問いましたが、知らぬ、存ぜぬで　どうしても云いません。　そのうち妻は　子を責められる苦しさに、遂に狂い倒れました。　それを見た子は、両親がなくなつては、生き長らえても致し方ないと　舌をかんで死にました。

清次はこれを伝えきき、自訴して罪を待つたのですが、領主は　妻の貞節を賞でゝ清次の罪を許しました。　清次も固も無く　自ら命を断つて妻子の後を追つたと云うことです。

これは謡曲の籠太鼓に出ていることで、昔は　玉島小学校の近くに一本の松と、五輪塔があつたと云うことです。

寺沢志摩守と虹の松原

虹の松原は　寺沢志摩守が防風林として、松を植えたと伝えられますが、その松を育てるために、「この数万株の松の中に自分の好きな松が一本ある。　もしこれを一本でも傷ける者あれば死罪に処す」　とふれさせ、その一本のありかを知らせませんでした。　時々、禁を犯して松を傷める者があると、役人をやつて木を調べさせ、「これは自分の愛する松でない」と云